

鈴木貞美『「日本文学」の成立』について、小谷野敦がブログに「あらぬことを書いている」と人から教えられて読んでみた。「はじめに」の「ヨーロッパやアメリカの人文学」という一語句を取り出して、アゲアシをとったつもりになっている。これが「ヨーロッパやアメリカの(各国「文学」すなわち)人文学」という意味だということは、前後2、3行を読めばわかるはずだ。もちろん、本論で、その内容を展開してある。

小谷野君は、わたしの不注意を咎めるつもりで、これを言っているのではない。鈴木は「同じような本を何冊も出す」とか、『日本の「文学」概念』がまるで理解できなかつたとか、述べている。これほど自分の読み書き能力の欠如を自ら喧伝する人も珍しい。「文化史・文学史の書き換え」や「概念・分析スキームの歴的・地理的相対化」ということが、問題意識にもひっかからない扁平頭を自己暴露しているだけだ。小谷野君は、次のテーマを「読めない男」のセルフ・パロディーにするつもりだろうか。

小谷野君が付箋を貼りながら読んだという『日本の「文学」を考える』は、「純文学」対「大衆文学」のスキームが、いつどのよう形づくられたかについて調べ、考察した本である。それに対して『日本の「文学」概念』は、それらの上位概念にあたる「文学」の意味の近代における組み換えについて調べ論じた本だった。対象にしている概念の水準がちがう。それがまったく理解できないらしい。

そして、こういう仕事は、おいそれと完結するものでないこともわからないらしい。「純文学」対「大衆文学」のスキームについても、今度の『「文芸春秋」とアジア太平洋戦争』で、ずっと気になっていた菊池寛の用法などについて補い、ようやく、ほぼ完結に近づいたか、と感じているくらいである。

なお、『日本の「文学」概念』は、韓国語・英語・中国語(2011予定)で翻訳出版され、英、仏などヨーロッパ諸語、中国、韓国、アラビア語(2010年、レバノン)など、博士論文や多数の論文に引用、参照されていることを申しそえておく。

それらに対して、『「日本文学」の成立』は、「日本文学」を焦点にして、「文学」（人文学）の下位概念の「哲学」「歴史」、さらに「哲学」の下位の「宗教学」、また「芸術」や「美術」、そして「文学」と横並びの「理学」「工学」「農学」などの編制について、日本の特殊性を論じたものである。

北村透谷の「文学観」や幸田露伴の「美術観」など個別ケースの具体的な分析も添えてある。これまでの北村透谷像や「人生相渉論争」についての見解を破り、また「伝統主義者」露伴というレッテルを引きはがす論考である。

そして、「西洋化=近代化スキーム」に立った中村光夫、江藤淳、柄谷行人らの文学史観の根本的な誤りをはっきりさせ、「自然主義」を基準にした既成文学史を解体再編するストラテジーを、これまでよりも明確にした。ついでに前田愛の「音読から黙読へ」なる見取り図が全くの妄説であること、では、「黙読」増加現象は、何によるのかも明確にしてある。

それと関連して、事典などに記され、広く流布している明治期「言文一致」論が観念過剰な解釈に陥っていることを示し、具体的に進行した事態とその理由を明示してある。

そこから、正岡子規や国木田独歩らが何を目指し、何を実現したかについて新たな見解を述べ、印象主義と象徴主義文藝の成立と展開について述べ、今後の研究の進むべき方向を提言した。

この書物も、すでに中国語訳が有力大学出版社から出ることが決まっている。

なお、帝国大学に農学部がつくられたことについては、19世紀後半のドイツで生物学や化学にもとづいた農学アカデミズムが形づくられ、農学部をもつ大学が増えていたのにならったものであること、また大正生命主義と併行する、かなり大きな動きがドイツで「生活改善運動」として展開していたこと、この2点について、昨秋、ドイツに行った折に、ハイデルベルクのシャモニ教授から教示を受け

た。ここで補っておく。これにヒントを得る人もいるだろう。

わたしは、何冊かの新書をふくめ、既存の概念(編制)や分析スキームそのものを対象に、それらの形成過程を歴史的地理的に相対化する作業を進めてきた。われわれが、これまで用いてきた「考察の道具」、モノサシの点検を一步一進めているのだ。それらの検討を通して、それらを超えるオルタナティブを提出してもいる。

これに対して、既存の概念やスキームを疑いもせず、寄りかかってきた人びとが面喰い、とまどいを隠せずにいることには同情しないでもない。それと気づかずに、あるいは、気づかぬふりをして、あいかわらず自分のモノサシで、わたしの仕事を裁断したつもりになる人もいるようだ。が、それはただ自分のモノサシの小ささを自己暴露しているだけのことだ。

わたしの仕事に誤記、誤植、ケアレス・ミスがつきまどってきたことは、率直に認める。それらは機会を見つけて訂正してきている。

それにしても、他人の論考の性格、構成、文脈、含意を読み取れず、ほんの一部や一文のみ取り出してアゲアシをとったつもりになるテアイが増えていることには驚かされる。リテラシーの低下に加え、思考の短絡や、逆を考えない一方通行も目立つ。いったい、いつから、こんなことになってしまったのか。こちらがとまどうばかりである。

鈴木貞美(2011/3/10、28、4/10)